【33】

氏　名（本籍）	松本　健（東京都）（まつもと　けん）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　3580　号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	**仮名草子における物語の作成**

主　査	筑波大学教授		名波弘彰
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒木正純
副　査	筑波大学助教授	博士（学術）	秋山　学
副　査	筑波大学助教授		小松建男
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	綿抜豊昭

論文の内容の要旨

仮名草子とは，近世幕開けの十七世紀初頭から西鶴『好色一代男』の登場する天和二年あたりまでに著作刊行された散文文芸の総称であるが，名称が内容ではなく〈仮名で書かれた〉という表記上の共通点によって認識されているのは，その文芸を文芸たらしめている本質にしかるべき呼称を与えるほどの特徴がまだ見いだされていないからであった。したがって仮名草子研究において現在要請されている課題の一つは，真に当代より出発したといえる仮名草子の文芸的本質を発見し，その存在理由を探ることによって仮名草子全体を逆照射していく試みである。

本論文の目的は上記の現状を踏まえて，仮名草子の形成に大きな意味をもった〈物語の作成〉という行為とその意識を，具体的に『竹斎』と『浮世物語』を取りあげて追求するところにある。

本論文の構成は以下の通りである。

〔本論文の構成〕

序章

第一部　『竹斎』論－新しき世を受容する寓話－

　第一章　端緒としての挿話解釈

　第二章　知の共有と笑い

　第三章　焦点化された齟齬

　第四章　東下りにおける政治とカムフラージュ

第二部　『浮世物語』論－物語とハナシの往還－

　第五章　〈話材〉の独立と浮世観

　第六章　主人公の機能と巻第二の断層

　第七章　了意の思わくと物語の変容

結章

第一部では『竹斎』における〈物語の作成〉を多角的に論じる。書誌的研究・注釈・作者及び成立時期の

考定などが進んでいた『竹斎』の研究史において，はじめて物語内容を問うことになったのは，寛永整版本に増補された播磨侍の挿話の扱いをめぐる解釈からであった。そのため第一章は，研究史の動向に沿ってこの挿話に対して新たな解釈を試みることになる。まず，この挿話の舞台は源平時代の源氏の武将熊谷二郎直実の発心譚のエピソードを伝える京都黒谷であったこと，さらには『田夫物語』という類似のテーマを語る仮名草子の技法との関連，これらを考慮すると，切腹未遂騒動を描くこの挿話は，主人公が男色に殉じて後追い自殺を遂げるといった中世的な死の美学をなんとか逃れようとする滑稽なハナシと解釈することができる。作者や読者が共有していた〈知〉が前提になることで，男色の純愛などからは距離を置いた功利的人間が前景化されることになる。

第二章では，『竹斎』の療治譚に新しい意味を読み取ろうと試みる。そのため瘡気（かさけ）患者の療治について近世の曲直瀬流医学の知見と比較するかたちで考察される。それによると，この病気の当代性ゆえに療治法がまだ確立されていなかったにもかかわらず，いかにも療治方法が確立されているかのようにふるまう竹斎の滑稽さがこの話譚にはあるとする。しかしその滑稽さは当代医学に精通した極めて少数の人だけにわかるものであり，もしそうだとすると，従来の通説である庶民の笑いを趣向としていたとされる本質論は問い直されねばならないという。〈物語の作成〉には当代の作者にとって深刻な状況を描くことで，その状況を共有することのできる少数の読者が求められるものもあったという解釈が導き出されている。

第三章では，第二章の作者と読者による〈知〉の共有という前提を踏まえて『竹斎』の療治譚全体が分析されている。当代医書あるいは他の仮名草子に収載される類型の笑話との比較考察から，これらが先行研究で言われているような類型的笑話の二番煎じなどではなく，むしろ療治の形式性を厳密に守ることで，逆に療治の無効性を糊塗しようとする滑稽さを意図するものであったことを明らかにしている。それは『竹斎』の発想の根幹にかかわるものであり，中世から近世への時代の転換期における言葉と意味あるいは形式と内容のズレ（齟齬）がひき起こす悲喜劇を映すものだったと結論づけている。

第四章の考察対象は，『竹斎』に描かれた京内参りと東下りである。まず，寺社巡りの場面が「王難」というものをテーマに構成されていること，そしてその政治性をカムフラージュするために滑稽な語りへと連結されていることが指摘される。なぜ「王難」なのかを解く鍵と見られるのがモデルと推定される曲直瀬玄朔の存在であると認め，考察は彼の動向を当代の記録から再構築することに向かう。玄朔の徳川家との長い緊張関係は元和期の東下りの意義深さに結びつき，「王難」と東下りのモチーフは玄朔が徳川の世を消極的に受け入れていく過程の物語であったという解釈が導き出される。『竹斎』は虚構性を前面に出した〈物語の作成〉の先駆けとなったのだが，それは実在の人物の命運に関連させて当代を描くことへの欲求と，政治的な危険を回避する必要性との狭間で虚構としての物語が作成されたと捉えられる。

第二部では『浮世物語』を素材にして〈物語の作成〉というテーマが追求される。第五章では，冒頭の「浮世といふ事」の「浮世」の意味が課題となる。先行研究では中世的仏教観を背景とした「憂世」から，解放的で享楽的な人間観にもとづく「浮世」への意味の転換と捉えられてきたが，当時の「うきよ」の用字用例を調査した結果，「憂世」から「浮世」ではなく，「憂世」でもあり，「浮世」でもあるという結論が得られるとする。この結論は，時代の転換期にあっては，言葉と意味にズレが認められ出した時点の所産であって，決して中世から近世へと，時代がすっかり変わったという時点での用語例を意味しないと捉えられる。しかし少なくとも中世的な宗教体系の〈法〉が人生を組み込んでいた時代から，〈法〉から逸脱して享楽を肯定する人間主義にもとづくとはいえるとする。すると，物語は高次の〈法〉に奉仕するだけではなく，享楽的現実に生きる人間に価値を求める個々の物語（ハナシ）が作成されるようになったと結論づけている。

第六章では，『浮世物語』の前半・後半の構成において大きな変化が見られることに着目し，作者の当初の目論見と技術的な限界について考察する。前半においては，作者が社会変革を期しての社会批判・政治批判を効果的に行うために，矮小滑稽な主人公を設定していたことを明らかにする。しかし後半になって前半

の主人公が存在感を失ってゆくとともに，物語はたんなる無意味な教訓の羅列になってしまうとされる。論述はこのような変化に関心が向けられ，巻第二の「鳩の戒の事」における作者の知識の偏りにその変化の原因が求められることになる。〈物語の作成〉がいまだ教訓という外部の主題を追求する段階では，物語の展開が主題の変化・拡大に相関して長大化することはむずかしいとされ，物語内部に主題が求められない語り口はそのまま物語の構成を変化させてしまうと結論づけられる。

第七章では，〈物語の作成〉ということの本質が追究される。論述は三教一致の問題，カムフラージュの技法，内容と名称の関係といった三者についてなされている。論述は多岐にわたるが，その焦点は，このテキストには『浮世物語』以外，『浮世はなし』『続可笑記』などといった別題が存在することによる内容と名称の関係にしぼられる。この別題の存在が示唆することは，「物語」に〈ハナシ〉のもつ仮構という趣向が含意されるようになったということである。それは仮名草子を場とする〈物語の作成〉が中世までの事実性に依拠する「昔物語」から大きく飛躍することになったことを意味すると結論づけられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文によれば，まず第一に中世までの物語は，語られるべき人物や事件の実情（事実）を伝えることを目的とするような体裁をとっていたのだが，近世になって滑稽性の発揮が主眼となるような虚構の物語が多く登場する。物語伝統のこういった転換には，『竹斎』と『浮世物語』が大きく関与しており，それは〈物語の作成〉という行為と意識への注目によって明らかになるという。さらに第二には，近世に多くの物語が生産されるようになっていった契機は，仮名草子を場として，まったく虚構にもとづく〈物語の作成〉が許されるという認識が拡大していったからだという。これら二点の見解は本論文の主題の考察にとってきわめて斬新な認識と評価される。

それとともに，本論文の主題を追求する前提となる基礎作業においても評価しなければならない点がある。それは第一部第二章・三章の論考，それに四章における資料の発掘とその読解の緻密さである。前者ではきわめて難解な曲直瀬流医学関係資料を読み解き，『竹斎』の療治譚に新知見をもたらすことに成功している。著者の資料発掘の力量は第四章の曲直瀬玄朔の経歴をたどる精細な調査にもいかんなく発揮され，『竹斎』の東下りが玄朔の元和期の史実にもとづくことが実証された。

これらの指摘を通して本論文は，作者と読者が共有していた〈知〉を推察することで仮名草子における〈物語の作成〉を考えたわけだが，この結論によってこれまでの庶民向きの拙い内容のものと概括される通説を積極的に解体する一石を投じることになった。

ただ，このような本論文であっても，欠点がないわけではない。その一つは，第一部と第二部を統合する視点あるいは構想性が乏しいということである。第一部の「反語の方法」と第二部の「反治の方法」が類似しているのだが，本論文はその類似性を通して第一部と第二部を有機的に構造化しえていないことが指摘できる。二つ目には仮名草子の〈笑い〉を時代の転換期における人間主義に結びつけようとするとき，中世から近世へという文化史的背景に対する洞察が必要となるのだが，その点ではまだ十分説得的だとはいえないこと。そして三つ目には，近世初期の仮名草子の世界が大きく中世の文芸と異なる点としては，出版事業の存在が指摘できるのだが，本論文ではほとんど考慮されていないことである。

しかし以上を総括すれば，作品分析における新たな資料の発掘と緻密な読解作業が新しい知見をもたらしたこと，また〈物語の作成〉という本論文をつらぬくテーマ性が多角的な観点から一貫して追求されることなどが本論文を労作たらしめていることは確かである。このような成果からすれば，さきに指摘した欠点は著者の今後の研鑽において十分克服可能なものと信ずる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。